

平成21年 6月 1日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520332
 研究課題名（和文） 日独対照メディア言語学—言語記号と視覚的記号の關係に焦点を当てて—
 研究課題名（英文） A Contrastive Linguistic Study of Japanese and German Media:
 The Relationship between Linguistic and Visual Sign
 研究代表者
 渡辺 学 (WATANABE MANABU)
 学習院大学・文学部・教授
 研究者番号：00175126

研究成果の概要：

ビジュアル・グラマー、タイポグラフィーなどに注目しながら、日本語とドイツ語を中心とする言語社会での言語記号（文字）と視覚的記号（図像）の分布や使用法を観察し、文字と視覚的要素との相互行為によって生み出される意味創出と意味伝達の動的な諸相を調査分析・考察し、テキストデザインの問題性とのリンケージを試みたうえでポライトネス研究へと視野を拡大することにより、爾来の社会言語学のテーマ領域的・方法論的進展への貢献を行った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	540,000	3,840,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：ビジュアル・グラマー、文字シフト、タイポグラフィー、テキストデザイン、デジタルニューメディア、ポライトネス研究、社会言語学、メディア言語学

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、2000年以降若者ことば研究に精力的に取り組んできた。「若者ことば」研究とは、社会言語学のなかでも「世代語」として言語の現象形式をくくる切り口による分析である。この研究を推進する過程で研究代表者は、一方で、「世代語」のひとつとしての「若者ことば」と「日常言語」「通用語」などを明確に区別することの困難につ

きあたり、他方では、若者ことばの主な分析資料として用いた携帯メールをきっかけに、メディアやテクノロジーへの関心を強めるとともに、とりわけ、そうした「外在的要因」によって言語の現象形式も規定されることがあることに注目することになった。さらに、ドイツ語の個別性を捉えるためには、他の言語（とりわけ日本語）との対照が不可欠であ

ることであらためて気づいた。こうした問題意識から、2005年に至ってから「メディアとことば」研究会にも参加し、同研究会のメンバーとの専門討議や意見交換の機会をもつようにした。分担者の岡本能里子氏は、この研究会の中心メンバーのひとりでもあり、かねてより電話、留守番電話などのメディアに注目し、また「談話分析」に主眼を置いた研究を推進し、最近では電子メール、ビジュアル・グラマーの研究に視野を広げ、精緻な調査分析を進めている。日本語分析の手法にも優れており、日独語の対照研究を推進するのにうってつけであった。分担者の甲賀正彦氏は、デザイン、イラストレーションの創造性や働きについての歴史的・理論的考察を展開するかたわら、グラフィックデザインの分野でさまざまな国際出品と入選実績のあるすぐれたクリエイターであり、境界横断的な本研究に新たな視点を導入することが期待された。

(2) 研究を真の意味で国際化し、日本的に狭隘な視点を相対化し、拡張するには、海外の専門家との協力が欠かせない。チューリヒ大学のデュルシャイト教授、シュピッツミュラー助手とはすでに2005年2月の国際若者語会議を機に緊密な連絡を取り、携帯メールにおける方言語法やメディア言語学の最新状況についての情報・意見交換を行っていた。また、アーヘン工科大学のイエーガー教授とは、2004年11月のケルンにおけるコロキウム以来、メディアの意味・意味論や文字、記号についての情報・意見交換を行っていた。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、言語学の問題認識と手法に基づきながら、ニューメディアに映じた言語の特徴を明らかにし、その言語特性と不即不離の関係にあるコミュニケーション様式やニューメディアの使用者のコミュ

ニケーション行動の特性を抽出することである。電子メール、携帯メールなどの言語特性分析、なかでも談話構造分析およびコミュニケーション研究を推進し、調査分析を行うなかで社会言語学(変種言語学)的視野から日独対照メディア言語学を進展させること、また同時に、対照研究的アプローチにより言語、記号、文化の伝統的境界を越境しつつあるドイツ語ならびに日本語の最前線の姿を照射することを副次的な目的とする。

3. 研究の方法

①従来の研究成果としての文字論や記号論の達成を土台としつつ、特に、現在新しいメディアにおいて文字と共に多用される記号、絵文字、イラスト、フォントの差異化、文字の色などに注目し、それらと文字テキストとの相互作用によって文脈に埋め込まれたことばの指標的な意味が生み出されていく過程をメディア言語学的視座で解明する。

②デザインの作り手の視点にも立って、コミュニケーションの受容者の層、またそれに即応したメッセージ性の位相をどのように定めるかにも注目しながら、テキスト内に埋め込まれた「ビジュアル・グラマー」とも呼べる「新しい」文法の把握と記述を試みる。

③テクノロジーと言語の関わりについても言語記号(文字)と視覚的記号(図像)の分布や使用法に焦点を当てながら考究する。

④グラフィックデザインの分野での作品と書体の関係についてのパイロット的なアンケート調査を実施し、タイポグラフィーとデザインの機能を理解する助けとする。

⑤国内外の研究者から関連領域についての第一線の専門的知識の提供を得、討議・質疑応答を通じて、当該テーマの知見を深める。

4. 研究成果

平成 18 年度 (2006) は、全計画の土台づくりとして、ニューメディアテキストの言語的特徴やコミュニケーション様式の特性把握に集中した。言語記号と視覚的記号に関する従来の研究を鳥瞰するかたわら、最新の書誌媒体やネット上の資料を収集・分析しながら、メディア言語学の最前線の問題性把握と整理に努めた。従来型メディアの新聞については、一面広告の内容と縦書き・横書きの関係を探究し、複数の日本語表記間のシフトによる意味創出のダイナミズムと柔軟性を浮き彫りにすることができた。また、ニューメディアにおけるドイツ語のテキスト構成においては、文字シフトが不在な分、タイポグラフィやレイアウト、配色などに特段の意を払う必要があるとの仮説に達した。

平成 19 年度 (2007) は、日本語とドイツ語両言語社会においていかに「ビジュアル・グラマー」がデザインされ、発信者と受信者の相互行為を通して、「文法化」されていくのかを対照言語学の視点を出発点として考察した。デザインにおいては一般に図像が「地」となり、タイトルやキャプションなどの文字が「図」となると考えられるが、実は文字自体もデザイン性を帯びているという二重構造 (多層的構造) が潜在している。こうした機制についての詳細で多角的な考察を展開するため、研究期間の全般にわたりタイポグラフィの特性把握とメディア論の最新成果の取り込みに努めた。10 月～11 月のチューリヒ大学での研究滞在はとりわけ、タイポグラフィとテキストデザインの構造と機能、普遍性と文化的差異を把握する絶好の機会となった。

平成 20 年度 (2008) は、年度初めにグラフィックデザインの分野での作品・書体の関

係についてのアンケート調査を施行したほか、8 月には、言語学的視点からメディア理論を構築しているイェーガー教授を研究代表者が訪問して意見交換を行い、当該課題の問題圏域の意味論的基礎づけ、メディアと (言語) 記号、タイポグラフィの相関関係の普遍性と言語文化による相対性について概観する指針を得た。平成 21 年に入ってから、文学・文化研究領域で言語テキストと図像の関係を考究している研究者、ならびに装丁デザインの現場で研さんを積んでいる専門家から当該部門における最前線の知識の提供を得、その場での質疑応答とディスカッションから、絵画、ポスター、工業製品、書籍などに代表される文化事象、あるいは広く、それらを含み込む社会史をも参照したマクロな視点に立脚してこそ、タイポグラフィやテキストデザインの布置に有意味な形で論及できることが明らかとなった。以上のように概観した本年度の研究成果は、いわゆるデジタルニューメディアにも着目しながら、日本語やドイツ語をはじめとする言語社会における言語記号 (文字) と視覚的記号 (図像) の分布や使用法を観察し、文字と視覚的要素との相互行為によって生み出される意味創出と意味伝達の動的な諸相を考察・分析した研究代表者の論考 (渡辺 2008 ; 5. の論文⑤) に結実している。なかでもテキストデザインの問題性とのリンケージを試みたうえでのポライトネス研究への視野拡大は、爾来の社会言語学の方法論的進展にも貢献するものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 17 件)

①渡辺学: 話しことばの特性をどのように測定したらよいか?、高田博行編『日本独文学

会研究叢書』、印刷中、査読無。

②岡本能里子：学校教育における規範としての「談話構成」、大島弥生・大場理恵子・岩田夏穂編『日本語表現能力を育む授業のアイデア』、ひつじ書房、196-200頁、2009年、査読無。

③岡本能里子：「間違いメールとメーリングリストのマナー」、『日本語学』2月号 (Vol.28-2)、明治書院、66-75頁、2009年、査読無。

④渡辺学：コミュニケーションの現在、あるいは、われわれのウチとソトなる「多言語共生態」について、立教大学ドイツ文学論集『ASPEKT』第42号、31-73頁、2009年、査読有。

⑤渡辺学：対人配慮・親密性の表現からテキストデザインへ—日独語の日常語を出発点に—、阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』第50号、81-97頁、2008年、査読有。

⑥Manabu WATANABE：Aspekte der Medienlinguistik von heute. Zwischenbilanz und Ausblick, in: Koreanische Gesellschaft für Germanistik(ed.): Kulturwissenschaftliche Germanistik in Asien, vol. 3, Seoul: EURO Trading & Publishing Co., 2008, pp. 149-159, 査読有。

⑦Manabu WATANABE：Mobiles Fon, Handy und Keitai, in: Peter Schlobinski/ Torsten Siever/ Jens Runkehl (eds.): Das Internet in 10 Jahren.

<<http://www.mediensprache.net/networx/networx-53.pdf>>, Hannover 2008, pp. 72-79, 査読有。

⑧渡辺学：メディアと言語の関係をどうとらえるか—オンラインデジタルメディアを中心に—、日本独文学会編『ドイツ文学』第136号、1-22頁、2008年、査読有。

⑨渡辺学：ドイツメディア言語学の現況—携

帯メールテキストの日独比較を出発点に、岡本能里子・佐藤彰・竹野谷みゆき編『メディアとことば 3 特集 社会を構築することば』、ひつじ書房、2008年、1-23頁、査読有。

⑩岡本能里子：日本語のビジュアル・グラマーを読み解く—新聞のスポーツ紙面のレイアウト分析を通して—、岡本能里子・佐藤彰・竹野谷みゆき編『メディアとことば 3 特集 社会を構築することば』、ひつじ書房、26-55頁、2008年、査読有。

⑪Manabu WATANABE：Handysprache und -kommunikation im Spannungsfeld zwischen Mündlichkeit und Schriftlichkeit, in: Ryozo Maeda, Wilhelm Vosskamp, Teruaki Takahashi (eds.): Schriftlichkeit und Bildlichkeit. Visuelle Kulturen in Europa und Japan, München: Fink, 2007, pp. 251-263, 査読有。

⑫Manabu WATANABE：Charakteristika der medial geprägten Umgangssprache gegenüber der Standardsprache. In: Schmidt, Maria Gabriela (Hg.): Aspekte der deutschen Standardsprache: Entwicklung und Gebrauch, Studienreihe der JGG Nr. 048, Tokyo: Ikubundo, 2007, pp. 40-50, 査読無。

⑬岡本能里子：未来を切り拓く社会実践としての日本語教育の可能性—メディア・リテラシー育成を通じた学びの実践共同体をデザインする—、小川貴士編『日本語教育のフロンティア—学習者主体と協働』、くろしお出版、79-110頁、2007年、査読無。

⑭岡本能里子：あいづち研究のための新たな視点に向けて—スコット・サフト氏の発表を聞いて—、大原由美子編『日本語ディスコースへの多様なアプローチ—会話分析・談話分析・クリティカル談話分析—』(国立国語研究所研究会報告論集)、凡人社、155-172頁、2007年、査読無。

⑮ Peter Schlobinski/ Manabu WATANABE:

Mündlichkeit und Schriftlichkeit in der SMS-Kommunikation. Deutsch - Japanisch kontrastiv, in: Eva Neuland (ed.): *Variation im heutigen Deutsch: Perspektiven für den Sprachunterricht*. Frankfurt etc.: Lang, 2006, pp. 403-416, 査読有。

⑩ Manabu WATANABE: Varietätenlinguistische und historische Aspekte der Erforschung der Jugend- und Umgangssprache, In: Franz Hundsnurscher/ Roland Harweg / Eijiro Iwasaki (eds.): „*getriwe ân allez wenken*“. *Festschrift für Shoko Kishitani zum 75. Geburtstag*. Göppingen: Kümmerle, 2006, pp. 196-210, 査読有。

⑪ 渡辺学: 携帯メールのドイツ語—エモティコン、テキスト構成を中心に—, 渡辺学編『日本独文学会研究叢書』046, 15-28 頁, 2006 年、査読無。

[学会発表] (計 8 件)

① 渡辺学: 話しことばの特性をどのように測定したらよいか? (シンポジウムIV 「話しことば研究をめぐる 4 つの問い」研究発表)、日本独文学会秋季研究発表会、2008 年 10 月 12 日、於岡山大学。

② Manabu WATANABE: Zur Tragweite der Kommunikativen Stilistik in transkulturellen und -lingualen Kommunikationssituationen. アジア・ゲルマニスト会議金沢大会(Asiatische Germanistentagung in Kanazawa 2008: Transkulturalität: Identitäten in neuem Licht)、2008 年 8 月 27 日、於金沢星稜大学。

③ 岡本能里子: メディア・リテラシーを育む日本語教育実践 (『ビューイング教育を日本語教育に導入する試み』門倉正美、奥泉香との共同発表)、第 7 回日本語教育国際研究大会 (International Conference on Japanese Language Education)、2008 年 7 月 13 日、於韓国・釜山外国語大学校。

④ Manabu WATAMABE: Wie man Grenzen

überspringt. Zu „Kulturemen“ und sonstigen Messgeräten in der interkulturellen Kommunikation. Symposium im Rahmen des Partnerschaftsprojektes der Unversitäten Tsukuba, Gakushuin und Bayreuth: Kulturelle Identitäten im Kulturkontrast. Konzepte, Formen und Perspektiven der Diskurse über Japan, Deutschland und Europa aus linguistischer, literatur- und kulturwissenschaftlicher Perspektive. (パイロイト大学、筑波大学、学習院大学共同シンポジウム研究発表)、2007 年 9 月 30 日、於学習院大学。

⑤ Noriko OKAMOTO: Multimodal modes of meaning by Japanese visual design -Analysis of constructing relations through internal corporate ML messages- (パネルセッション 代表 佐藤彰 パネルタイトル Construction of interpersonal relationships in CMC - in the case of Japan (三宅和子、竹野谷みゆきとの共同発表))、第 10 回国際語用論学会 (IPrA)、2007 年 7 月 9 日、於スウェーデン・ヨーテボリ大学。

⑥ Manabu WATANABE: Zu dem Varianten- und Sprachenwechsel in der Kommunikation von heute. Am Beispiel des Deutschen und des Japanischen und einiger weiterer Sprachen. Humboldt-Kolleg 2006 Rikkyo、2006 年 9 月 10 日、於立教大学 (招待講演)。

⑦ Manabu WATANABE: Aspekte der Medienlinguistik von heute. Zwischenbilanz und Ausblick. アジア・ゲルマニスト会議ソウル大会 (Asiatische Germanistentagung Seoul 2006: Kulturwissenschaftliche Germanistik in Asien) , 2006 年 8 月 30 日、於韓国・ソウル大学。

⑧ Manabu WATANABE: Verhalten der (medial geprägten) Umgangssprache gegenüber der Standardsprache. Symposium II: Aspekte der deutschen Standardsprache: Entwicklung und

Gebrauch (シンポジウムにおける研究発表)、日本独文学会春季研究発表会、2006年6月4日、於学習院大学。

[図書] (計1件)

①岡本能里子・佐藤彰・竹野谷みゆき編『メディアとことば 3 特集 社会を構築することば』、ひつじ書房、2008年。渡辺学：担当箇所：論文⑨、記事②、岡本能里子担当箇所：はしがきi-iv、論文⑩、記事③。

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他] (計5件)

①作品：甲賀正彦：イラストレーション・ポスター作品2点、『東京工芸大学紀要』第15号、127-129頁、2009年3月。

②記事：渡辺学：マンハイム滞在記、郁文堂「Brunnen」第451号、6-9頁、2008年6月。

③作品：甲賀正彦：立体イラストレーションをデザインしたポスター作品2点、『東京工芸大学紀要』第14号、139-141頁、2008年3月。

④記事：渡辺学【コラム】文字の歴史と絵記号、岡本能里子・佐藤彰・竹野谷みゆき編『メディアとことば 3 特集 社会を構築することば』、ひつじ書房、24-25頁、2008年3月。

⑤記事：岡本能里子【コラム】ビジュアル・グラマー、岡本能里子・佐藤彰・竹野谷みゆき編『メディアとことば 3 特集 社会を構築することば』、ひつじ書房、56--57頁、2008年3月。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 学 (WATANABE MANABU)
学習院大学・文学部・教授

研究者番号：00175126

(2) 研究分担者

平成18～19年度：

岡本 能里子 (OKAMOTO NORIKO)
東京国際大学・国際関係学部・教授
研究者番号：20275811

甲賀 正彦 (KOGA MASAHIKO)
東京工芸大学・芸術学部・講師 (18年度) / 准教授 (19年度)
研究者番号：90386904

(3) 連携研究者

平成20年度：

岡本 能里子 (OKAMOTO NORIKO)
東京国際大学・国際関係学部・教授
研究者番号：20275811

甲賀 正彦 (KOGA MASAHIKO)
東京工芸大学・芸術学部・准教授
研究者番号：90386904